学部
大学
治営
明経

り

国語問題

はじめに、これを読みなさい。

1 この問題用紙は12ページある。**ただし、白紙はページ数に含まない。**
2 試験時間は60分である。
3 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
4 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
5 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答欄は裏面にもある。
6 問題が指示する数より多くマークしないこと。
7 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。
8 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
9 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
10 **解答用紙はすべて回収する。**持ち帰らず、必ず提出すること。
11 この問題冊子は、必ず持ち帰ること。
12 解答をマークするときには、記入例を参照すること。

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ○

(マーク記入例)

(一)　次の文章は政治哲学者ハンナ・アーレントについて述べたものである。よく読んで、後の問に答えよ。

五七年一〇月には、ソビエト連邦が世界初の人工衛星スプートニク号の打ち上げに成功し、冷戦下の宇宙開発競争がはじまった。ソ連に先を越されてショックを受けたアメリカでは、国をあげての科学教育と研究が要請され、科学推進熱が高まっていた。実現まではまだ二〇年ほどかかったが、体外受精による「試験管ベビー」の研究も進行中だった。そうしたなかでアーレントは、科学技術と人間の営みとの関係、A地上に生きる人間の条件をいまいちど理解しなければならないと考えた。彼女は次のように書いている。

問題は、ただ、私たちが自分の新しい科学的・技術的知識を、この方向に用いることを望むかどうかということであるが、これは科学的手段によっては解決できない。それは第一級の政治的問題であり、したがって職業的科学者や職業的政治屋の決定に委ねることはできない。

（『人間の条件』プロローグ）

こうした時代背景にそれまでの研究が組み込まれ、『人間の条件』は書かれた。アーレントは自分の意図は、「私たちが行なっていることを考えること」だという。バークレー(注1)の最終講義で彼女が語っていたように、一人の人間がおこなっていることを考え、その使用法を知らなければ、「砂漠(注2)」に耐え、複数の人びとのあいだにある世界を形成しはじめることもできないからである。「オアシス」の使い方を知らなければ「呼吸できなくなる」ともアーレントは言っていた。「プロローグ」では彼女は次のように書いた。

これから私がやろうとしているのは、私たちの最も新しい経験と最も現代的な不安を背景にして、人間の条件を再検討することである。これは明らかに思考が引き受ける仕事である。ところが思考欠如(ソートレスネス)……こそ、私たちの時代の明白な特徴の一つ

のように思われる。そこで私が企てているのは……私たちが行なっていることを考えること以上のものではない。（前掲書）

The Human Condition という原題の英語版は一九五八年に、ドイツ語版は『活動的生』（*Vita Activa*）という書名で六〇年に出された。ドイツ語版は英語版のそのままの翻訳ではなく、他者による粗訳をもとにアーレント自身が本格的にテクストに手を入れたものである。とりわけ詩の引用などの文学的側面での註釈が大幅に書き加えられている点などから、近年のセンモン[a]的な研究では別の書としてとらえられることもある。ここでは最初に出た英語版の『人間の条件』を対象とする。現在「ちくま学芸文庫」に入っている志水速雄によるホウヤク[b]は七三年に中央公論社から刊行されたものであるが、志水氏は七一年の夏にニューヨークのアーレントの自宅をホウモン[c]し、彼女に二時間半のインタヴューをおこなっている。そして『人間の条件』に見られるアーレントの思想家としてのユニークさについて次のように書いていた。

彼女はもちろん日常語を用いて語っている。しかし、その日常語は彼女によってその語源にまでさかのぼって検討され、新しい意味、というよりはその言葉の根源的な意味を帯びて使用されている。このようにいわば歴史の歪曲（わいきょく）と垢（あか）を洗い落とされた言葉によって構成される彼女のユニークな世界は、世界を曖昧にしか見ていない人には驚きと新鮮さを与える反面、①既成の世界像に安住している人には理解しがたいのである。

（「ハンナ・アレント会見記」）

インタヴューは、当時の日本の読者には知られていなかったアーレントの亡命時代の経験やユダヤ人の問題についての話の後で、『人間の条件』の著者の肉声を伝えている。

「この労働・仕事・活動という概念をどこでえられたのでしょうか」という問いにたいして、彼女は「そういう質問をするのは男だけで、女はそんな質問をしません」と言い、「台所とタイプライター」という二つの異なる経験をあげた。［　I　］、と説明している。そして、「つまり、この理論はあなた自身の日常生活から生まれているということですね」という確認に、「その通

りです」と答えた。

さらにアーレントは、自分はとくにどの活動力を高く評価しているわけでもないと語り、自分はそのヒエラルキー(注3)の歴史的な変化を示そうとしたのだと語っている。この書で彼女は人間の活動力を、労働 labor、仕事 work、活動 action に区別して考察した。

労働は、［Ⅱ］を維持するための活動力であり、新陳代謝や消費と密接に結びつく肉体の労働であり、産物としてあとに何も残さない。それは、「努力の結果が努力を費やしたのと同じくらい早く消費される」営みであり、生物学的生命の循環つまり自然の過程に吸収される。［Ⅱ］の必要性に支配されるという特徴があるため、古代では価値の低いものとして隠された私的領域の奴隷や家内労働者の営みと見なされた。近代以降は労働の生産性と増殖力が注目され、労働は組織された分業やオートメーションというかたちで公的領域を席捲(せっけん)した。循環のなかにある労働は、プロセス的思考と連動する。

仕事は、ワークが仕事をするという意味の動詞であるのと同時に作品を意味する名詞であることに示されるように、相対的に耐久性のある物を成果として残す活動力である。仕事の制作物、すなわち作品は、死すべき人間の生のあとに残り、総体として人の手になる人工的な世界を打ちたてる。制作物は基本的には単独の人間が作る物ではあるが、その物は共有されうる物となり、人間から独立した世界の永続性をもたらす。芸術作品や詩も仕事の成果としての作品であり、死すべき人間の記憶を世界に残す役割をになう。制作物が目的である仕事の活動力は、目的と手段のカテゴリーによって決定づけられている。

活動は、人と人のあいだでおこなわれる［Ⅲ］や共同の行為であり、絶対に他者を必要とする活動力であり、人間が複数であるという事実への応答である。活動は、唯一無二の存在である人びとが複数で生きるという人間の条件に対応する。言葉と行為によって人は自分を人間世界の網の目のなかに挿入し、自分が「誰であるか」を示し、ときには「奇蹟」とも映る予測不可能な「始まり」をそのつど世界にもたらす。アーレントはこれを「第二の誕生」とも呼ぶ。この「誰であるか」の特徴は、自分自身には見えず、他者に見られ聞かれるということのなかで現れるということである。

人間が複数であるという事実に基づき、その共生をになう政治にとって、「誰であるか」の実現、つまり［Ⅳ］を目に見え

るものにすることは人間の生き残りにとって重要なものである。しかし、「誰であるか」が余計なことになった世界を、私たちは経験した。アーレントにとって政治は支配・被支配関係ではなく、対等な人間の複数性を保証すべきものであったが、目的と手段のカテゴリー、つまり仕事(制作)モデルに基づく政治や、労働のプロセス的思考が支配的になった世界で、「誰であるか」を示す活動、そして予測不可能な「始まり」の要素は脱落していったのである。

アーレントによれば、公的(パブリック)なものとは複数の人びとによって共有され、見られ聞かれるリアリティであった。現実が現実として把握されるのは、「私たちが見るものを、やはり同じように見、私たちが聞くものを、やはり同じように聞く他人が存在するおかげ」である。主観的な情動や私的な感覚は、言葉や行為や物語といった公的なかたちに変形されなければ、共有されえない。アーレントは肉体的苦痛を最も伝達しにくいものとして論じる。

また、公的なものは、人と人とのあいだにある世界そのものを意味している。アーレントはそれを座っている人びとのあいだにあるテーブルにたとえる。それは、人びとのあいだで進行する事柄の世界であると同時に、人間が仕事によってつくりだした耐久的な物の世界でもある。「公的空間は、死すべき人間の一生を超えなくてはならない」とアーレントは書く。テーブルである世界は人びとを結びつけると同時に分離させるものである。アーレントは大衆社会が耐えがたいのは、人間の数ではなく人びとの世界が「結集させ分離させる力」を失っているからだと述べる。

そうした世界や公的領域のリアリティは、さまざまな物の見方が同時に存在することによってのみ確かなものとなる。②「これが公的生活の意味である」とアーレントは言う。どれほど自分の立場が拡大されても、一つの物の見方だけではリアリティは生まれない。「物の周りに集まった人びとが、自分たちは同一のものをまったく多様に見ているということを知っている場合にのみ」世界のリアリティは現れるからである。

アーレントは私的 private という語を「奪われている」deprived と結びつける。そこで奪われているのは、他人によって見られ聞かれることやさまざまな物の見方から生じるリアリティである。それがいかに温かく心地のよい家族的空間であっても、究極的には「同じものにかかわっている」ということだけが共通点であるような多数の物の見方、つまり他者の存在を奪われている、

と言う。逆に私的領域にのみあるものは、他者からは見えない存在となる。

アーレントによれば、公的領域と私的領域の境界が最も際立っていたのが、古代ギリシアであった。(注4)ポリスという公的領域は、相互に対等な者(家長)が言論と行為をおこなう自由の領域だった。オイコスという家政の私的領域は家長が支配する必然の領域であった。しかし近代では、「社会」という新たな領域が勃興する。社会の構成員は平等であることが前提とされるが、そこでは順応主義(コンフォーミズム)の現象が生じ、一つの共通利害と満場一致の意見が力をふるう。「社会というものは、いつでも、その成員がたった一つの意見と一つの利害しかもたないような、単一の巨大家族の成員であるかのように振舞うよう要求する」とアーレントは書いた。そして、統治の最も社会的な形式として「 V 」による支配、つまり「無人支配」である官僚制をあげた。

社会は構成員に「正常な」行動 behavior を期待し、唯一無二の「誰か」を表す行為は規制される。社会的領域で人びとは平等者と見なされるのだが、そのなかで人間の複数性、人間の無数の差異が、共有の世界の特徴ではなく、私的な問題になったというアーレントの指摘は重要である。アーレントは、社会の勃興により公的に共有される世界が消滅すると言う。公的な世界は何よりもさまざまな物の見方によって成立するものだからである。それはさまざまな表現、人間の複数性と直結している。複数性を経験しうる VI の世界を失ったことによって人びとは自己へと投げ返された。アーレントは次のように書いている。

公的な共通世界が消滅したことは、孤独な大衆人を形成するうえで決定的な要素となり、近代のイデオロギー的大衆運動の無世界的メンタリティを形成するという危険な役割を果たした。

(『人間の条件』第六章)

＊文中に一部省略した箇所がある。

(矢野久美子『ハンナ・アーレント』より)

注

（1）バークレー……カリフォルニア大学バークレー校。アーレントは一九五六年まで客員教授として講義をした。

（2）砂漠……直後にいう「複数の人びとのあいだにある世界」が喪失した状況のたとえ。

（3）ヒエラルキー……ここでは、三つの活動力相互の体系的な関係のこと。

（4）ポリス……古代ギリシアの都市国家。そこでは共同体の一員として市民全体が政治に参与した。

問1　傍線部a～cのカタカナの部分を漢字に直せ。

問2　傍線部①「既成の世界像に安住している人」が本文の文脈において示す意味と、ほぼ同じになるものは次の中のどれか。もっとも適切なものを一つ選び、その番号をマークせよ。

1　時代を特徴づけている思考欠如の状況に気づかない人

2　日常語の意味を根源にまでさかのぼって検討しない人

3　手垢にまみれた歴史を改正しようとしない人

4　日常生活のなかで新しい概念を生み出さない人

5　労働の活動力を価値の低いものとし評価しない人

問3　空欄Ⅰを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　台所でスープをつくるのは息抜きになるが、タイプライターで書くのは深呼吸に等しい
2　台所でつくったオムレツはすぐになくなるが、タイプライターで書いたものは残る
3　台所での仕事はきつい肉体労働だが、タイプライターを用いる仕事は手も汚さない
4　台所でつくられる料理は日々新しいが、タイプライターは凝り固まった思考を再生産する
5　台所は女を疎外してきた歴史の象徴だが、タイプライターによって労働という経験が与えられる

問4　空欄Ⅱを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。ただし空欄Ⅱは二カ所あり、同じ語が入る。

1　近代　2　結果　3　消費　4　生命　5　世界　6　組織

問5　空欄Ⅲを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　言論　2　成長　3　単独　4　同一化　5　闘争　6　複製　7　労働

問6　空欄Ⅳを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　応答　2　循環　3　制作　4　予測　5　稀少性　6　事実性　7　対等性　8　複数性

問7　傍線部②「これが公的生活の意味である」とはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　同一のものごとに対して様々な見方をもつ複数の他人と現実を共有していると意識できることで、私たちが生きる世界のリアリティを得られるということ。

2　公的領域としての社会が人々の平等性を保証することで、分離してしまった大衆の情動や感覚を共有可能なリアリティとともに回復できるということ。

3　支配・被支配の関係から解放された世界のリアリティを政治が実現することで、複数の人々が共有できる目的と手段とが物の世界にも提供されるということ。

4　テーブルにたとえられる永続的な公的領域が仕事によって耐久的でリアルな世界として構築されることで、生身の身体がもつ限界を超えて共有されるということ。

5　人々が社会において現実を共有することで、たがいに見えなくなっていた私的領域の差異が可視化されて、他者というリアリティを明瞭にできるということ。

問8　空欄Ⅴを補うのにもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　相互に対等な者　　2　巨大家族の家長　　3　誰でもない者　　4　社会の構成員　　5　唯一無二の「誰か」

問9　空欄Ⅵを補うのにもっとも適切な三字の語を本文から抜き出せ。

問10　本文全体の内容からすると、二重傍線部Aにいう「地上に生きる人間の条件」とは、どのようなことと考えられるか。「規制」および「共有」の二語を必ず用いて、四十字以内で答えよ。（句読点は一字と数える）

(二)

次のⅠは『十訓抄』の和歌に関する逸話、Ⅱは『古今和歌集』の仮名序の一節である。ⅠとⅡを読んで、後の問に答えよ。

Ⅰ　鳥羽法皇の女房、小大進といふ歌よみありけるが、待賢門院(注1)の御衣一重[a]、失せたりけるを負ひて、北野に籠り(注2)、祭文書き(注3)て、[b]まもられけるに、三日といふに、神水をうちこぼしたりければ、まもり検非違使、「これに過ぎたる失やあるべき。出で給へ」と申しけるを、小大進泣く泣く申すやう、「①おほやけの中のわたくしと申すは、これなり。いま三日の暇[c]をたべ。それにしるしなくは、われを具し出で給へ。恨みあるまじ」と、みめ、かたち足らひ、愛敬づきたる女房の、うち泣きて申しければ、検非違使もあはれに思ひて、[d]のべたりけるほどに、小大進、

思ひ出づや②なき名たつ身は憂かりきと現人神になりし昔を

とよみて、紅の薄様一重に書きて、御宝殿におしたりける夜、鳥羽法皇の御夢に御覧ずるやう、よにけたかく、[e]やむごとなき翁の、束帯にて御枕に立ちて、③「やや」とおどろかし参らせて、「われは北野の右近馬場(注4)の神にて侍る。④めでたきことの侍る。御使たまはりて、見せ候はむ」と申し給ふ、とおぼしめして、うちおどろかせ給ひて、⑤「天神の見えさせ給ひつる。いかなる御事のあるぞ」と、「見て参れ」とて、「鳥羽の御馬屋の御馬に、北面のものを乗せて、馳せよ」と仰せられければ、馳せて参りて見るに、小大進は雨しづくと泣きて候ひけり。

御前に紅の薄様に書きたる歌を見て、これを取りて参るほどに、いまだ参りつかぬさきに、鳥羽殿南殿の前に、かの失せたる御衣をかづきて、さきをば法師舞ひ、しりをば敷島とて、待賢門院の雑仕なりけるが、かづきて、獅子に舞ひて、参りたりけるこそ、天神のあらたに歌にめでさせ給ひたりけると、めでたく侍れ。

すなはち、小大進をば召しけれども、⑥「かかるもんかうを負ふことは、心わろきものにおぼしめさるるやうのあればこそ」とて、やがて仁和寺なる所に籠り居にけり。

A

と、古今集の序に書かれたるは、これらのたぐひなり。

Ⅱ　やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

注　（1）　待賢門院……鳥羽天皇の皇后、藤原璋子。
（2）　北野……北野天満宮のことで、主祭神は讒言で失脚した菅原道真。
（3）　祭文……神仏に捧げて祈願する言葉。
（4）　右近馬場……菅原道真は初め、ここに祭られた。
（5）　もんかう……疑いの意。

問1　傍線aはひらがな一字で、傍線cはひらがな三字で、それぞれ古語の読みを書け。

問2　傍線b・d・eは次のように解釈できる。空欄にそれぞれ適切な漢字二字の熟語を入れよ。

b　彼女は□□されたままだったが

d　参籠を□□してやった

e　□□な翁

問3　傍線①の説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　公的な機関であっても、特別に私的な事情を受け付ける部署があるということ。
2　公の事柄であっても、その中に少しは個人の裁量を許容する場合があるということ。
3　公の会議であっても、内容によっては個人の主張を採用する柔軟性があるということ。
4　公的な仕事に従事していても、個人的な理由で休暇をとれる決まりがあるということ。

問4　傍線②は、菅原道真の立場に重ねて、小大進が自分への嫌疑も無実だと言おうとしたものである。小大進は何について嫌疑をかけられているか。Ⅰの文中からその該当箇所を二十字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書け。（句読点は一字と数える。以下同じ）

問5　傍線③⑤は誰の言葉か。もっとも適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、その番号をマークせよ。

1　小大進　2　翁　3　法師　4　待賢門院　5　鳥羽法皇　6　検非違使　7　北面のもの

問6　傍線④は、右近馬場の神が見せようとしたものである。その具体的な内容を十字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書け。

問7　傍線⑥には、誰の誰に対するどのような気持ちが示されているか。次の空欄に適切な語を入れよ。

［イ］の［ロ］に対する［ハ］感

問8　空欄AにはⅡの一部が引用されている。該当する部分をⅡの本文から二十五字以上三十五字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書け。ただし、最後の三字には句読点を入れず、その語を終止形に直して書け。

問9　次の1～5はⅠとⅡの関係について述べたものであるが、間違っているものが一つある。それを選び、その番号をマークせよ。

1　ⅠとⅡはいずれも和歌の効用について書いている。
2　Ⅱは和歌の力を賞揚する点でⅠと考え方が共通している。
3　ⅡはⅠの話をもとに文学理論として書かれている。
4　ⅠとⅡは、和歌は時として神の心さえもゆり動かすと考えている。
5　Ⅱに書かれていることの具体的な一例がⅠである。